思想の簡素化[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

老子は「樸」といふことを讃へた、虚飾のないことである素朴といふことは、昔も今も徳ではあるが、歐米思想が入つてから、煩瑣が喜ばれた。單純な人といへば、低能兒を意味するやうにさへなつたのである。

　試みに、青年學生を捉へて、その人生觀を問うて見るがよい。彼等は、込入つた概念を、永々と列べることであらう。所謂教養の高い者であればあるほど、西洋哲學史全體を噪るだらう。その癖、彼は、自分がどこにゐるのか、何をしてゐるのか分らないのである。彼の頭は百科辭典のやうに複雜であるが、百科辭典のやうに統一原理を欠いてゐるのだ。皆知つてゐるやうで實は一つも知らず、ターレスからマルクスまでの世界觀、人生觀を諳んずるが、肝腎な己れの人生觀を所有してゐない。

　孔子は、「吾道一以貫之」をいはれた。一を以つて貫かれてこそ、あらゆる知識も生命を持つ。現代のわれわれに、もつとも欠けてゐるのが、この「一」だ。一のないことを迷ひといふ。皆が迷つてゐるのである。一言一行、はつきりせず、てきぱきしない。その「一」とは信仰であり、信念である。道である。

　すべての聖人の教は、この道に達する方便である。「己れを知れ」とは、知ることの根本であり、目標である。己れは何物であり、何をなすべきであり、如何に死すべきであるか、を知るものは、左顧右眄しない。彼は勇往邁進する。さういふ人の生活には、力があり、光輝があり、美しさがある。例へば、アツツ島玉碎の部隊長の行方である。その遺書を讀むと、實に簡素なもので、一點の飾も迷もない。一つの信念に沿うて勇往邁進するさまがありありと現れてゐる。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　‘

　山崎中將が、夫人に宛てたものを見よう。

「一、部隊長として、遠く不毛に入り、骨を北海の戰野に埋む。眞に本懐。況や護国の紳靈として悠久の大義に生く、快なる哉。

　二、思ひ遺すことさらになし。結婚以來三十年、良く孝貞の道を盡くし、内助の功深く感謝す。子供には賢母、私には良妻。そして終始變らざる愛人なりき、衷心滿足す。

　三、健康に留意、老後を養ひ、子供達は勿論、孫共の世話までせられたし、保代」

とある。

　何と簡素な、單純な考へ方であり、何と、確とした信念であらう。

　そして愛兒に宛てたものには、

「一、行く道は何にても宜し。立派な人になつて下さい。

　二、兄弟姉妹互ひに協力して、元気に活動しなさい。

　三、母に孝養を盡すことは、父の靈に對する、何よりの供養と存ぜられたし。父より」

　この簡勁なる數行の遺書によつて、われわれは、山崎中將の人生觀を覗ふことが出來る。即ち「忠孝」だ。大君のため、皇國のため、奮闘し、死することが本懐、「眞に本懐」であり、夫婦相和したのが、「衷心滿足」であり、「父母に孝に」「兄弟に友に」、立派な人になつて元気に活動するのが、子への唯一の遺言であるのである。

　この中に個人主義的の残滓は一つも雜つてゐない。實に玲瓏透徹なものである。

人間本來の面目とか、本地の風光とかいふのは、私慾によつて汚されてゐない心境を指すものである。一旦私慾から解放される時に、われわれは聖人となり神となるのであつて、そこにこそ眞の幸福はあるものである。山崎部隊長の心境はそれだと思ふ。彼が敵中に奮迅して、力の限りに闘ひ、斃れる時、その幸福は絶頂に達したであらう。眞に本懐であつたであらう。區々たる一身一家に執着して、利慾の泥濘の中に彷徨ふものには、かゝる清涼境は夢想も出來ないことである。

山本元帥は、「言舉げせざる」といふ、東郷傅統の方で、何も残した言葉がないのであるが、山崎部隊長の遺書によつて、元帥の心境も推察出來ると思ふ。

　大東亞戰宜せらるゝや、山本元帥は、間髪を容れず、米の太平洋艦隊を粉碎されたのであり、その後幾多の大戰果を収めて、遂に、空中指揮中華と散られたのであるが、この間一年有半、元帥の心境も生活も實に単純であり簡素であつたものと思ふ。即ち、「米英を撃滅せよ」との、おほみことをかしこみ、己れを忘れ、家を忘れ、すべてを忘れ、敵撃滅のことばかり考へてゐられた――これだけである。

朝起きる、顔を洗ふ、宮城を遥拝し、拜神の禮をする。朝食を取る、報告を受ける、命令を發する、晝食を取る、戰闘経過を聞く、新らしい命令を發する、入浴し、夕食を取り、想を練り、就寝する――これ以外に何もない。死も生もない苦も樂もない。そんなものは皆個人的なものだ。

　今日は自分で、飛行機で敵上空へ行つて見る必要があると思つたから、行かれた、そして敵彈に打たれた、基地に歸られて、なくなられた、かくして、山本元帥は、「鞠躬盡瘁死而後已」の生涯を閉ぢられたのである。誠に、單純で、簡素で、明燎な生活振りである。富貴、功名、安逸など、一點の陰翳も彼の心鏡を曇らせることは出來なかつた。複雜怪奇な哲學も人生理論も、元帥にはなかつた。これらのものは、いづれも迷へるものゝ迷ひ言であるからである。

　そもそも、「強い」とは、一點に集注された力のことだ。レンズによつて日光を集注すると恐しい熱を生する。焦點に當るものは燃焼する。われわれの精神力も同様で、幾筋にも散つてゐるから、熱も光も發しないが、それを一點に集注したら、金石を爍すほどの熱となり、天地を照らすに足る光となるものである。山本元帥の如きは、心を一點に集注した人だ。その一點とは忠である。

　さて、一個人が最大なる力を發する道は、その心を一點に集注することにあるのであるが、心の集中の道は何處にありや。それは、上にも述べた如く、私慾から脱するにある。然らば私慾から脱する道は如何に？これについて考へて見よう。

　人間が區々たる私慾から脱却する道は二通りに分けられる。一はその根蔕を絶つことであり、その二は、枝葉を剪除することである。

　根蔕を絶つとは、内省によつて、己れの心を諦觀して、私慾なるものゝ醜さを觀、それが、實はわが本性ではなくて、賊であることを看破し、その奥に、己れの眞性の隱されてゐることを發見して、再び迷ふことのないことであつて、これを、涅槃ともいひ、直指人心見性成佛ともいふのである。また悟りともいふ。この境地のことを本地の風光ともいふ。實は、これこそは己れの本性であるといふ意味である。これに對して、もつとも害毒をなすのは、人間のすべての惡を本能に歸するところの、西洋流の心理説である。西洋流の心理學で、いふところの本能というふのは、汚れてからの心の心理であつて、本源の心の心理ではない。本源の心、即ち心そのものは清淨なものであつて、汚濁は後天的なものである。この汚濁は拭ひ去ることの出來る垢であつて、本質的なものではない。この垢を拭ひ去れば、清明なる心の本體が現るといふのが、われわれ日本人乃至東洋人の考へ方であつて、西洋流の心理説は、心の分析でなく、心の垢の分析だ。われわれが禪を組み、禊をやるのは、實に心の垢を取る方便なのである。

　さて、垢が取れた心の風光はどんなものであるかといふに、それは説明が出來ない唯知るものぞ知るで、例へば、飛行機に乗つて、數千米の上空を飛翔してる者の心境のやうなもので、自分が、そこまで行つて見なければ、人の話を聞いたとて解るものではない。こゝに信仰の要があるのである。唯信じて、教へられた通りに修行して見ることだ。飛行士の技能が、飛行時間數に比例して、上達する如く、清明心は、修行時間數に比例して、光と力を發するといつてよいと思ふ。如何に本を讀んでも、人の話を聞いても、または自分で理窟を捏ねても、それは無駄だ。

　山本元帥や、山崎部隊長の心境も同様で、自分で、忠の生活を行じて見なければ解るものでない。

　禊の気持も、自分でやつて見て始めてわかる、禪も念佛も同様だ。自分で行じて見もしないで、どうのかうのと批評するのは、男が陣痛を諭ずるやうなもので、全然意味がない。

　次ぎに、私慾から離れる第二の道であるが、それは、實践から入ることである。一つ一つ私慾的なものを取り除いて行くことで、例へば、絶えず枝葉を伐採することによつて、草木の繁茂を制限するやうなものである。これも一生懸命にやれば、つひには、私慾の根蔕を枯らしてしまふといふ大結果に達するものである。この道こそは一般庶民の道であつて、日常生活から、漸次私慾的なもの、個人主義の我が儘を整理除去して行く方法である。今日の國民生活の建直しは、正にこの線に沿うてなされてゐるのである。いはゞ最少限度の私慾、最少限度の個人利得への努力だ。

　具體的にいへば、食事を保健に足るだけに切り詰める。食事をば、食慾の滿足、即ち享樂といふ見地から、生命と勞働力の維持といふ尺度に切り替へる。鱈腹食ふとか、美食するとかいふやうな、利己的なことを止める。そして、私の米、私の食糧といふ觀念を漸次減殺して行く。國家の米、国民全體の食糧といふ考へ方に移して行く。不足がち、不味いものがちに辛抱させ、滿足させ、感謝させる。こゝまで來たら大したもので、禽獣の域から萬物の靈長の地位に引上げられたことになる。

　衣服にしても同様で、國民服、モンペといふ風に、國家の物質節約、増産その他の戰力の増強に資するが如き衣服で滿足する。わが儘な贅澤を止める。着飾ることによつて自分の價値を引き上げようとする愚かな考から脱して、人の着る物と同じ物を着て、人よりも以上に働くといふ精神を磨く。人のより高價なもので、華美なものを貪るといふ幼稚な虚榮心から脱却する。今日はすでに、着飾ることが恥になつて來た。今尚、華美な身装をして、大道を闊歩してゐる連中は、あれは低能兒である。憐むべき愚物だ。

　次は家屋である。一時豪華な住宅を作ることが流行した。今日から見ると何んと馬鹿馬鹿しいことであらう。今は戰爭の最中だ。有り合はせで間に合はせることが、當然であつて、この際、自分一個人の邸宅を經營するものがあるとすれば、叩きのめしても惜しくないであらう。

　かやうに、日常生活から、個人主義的、營利主義的、享樂主義的のものを取り除いて行くことは、清明心の本性に立ち歸る大きな方便となるものである。大東亞戰以來、日々に強化されて[いる]統制生活こそは、一億国民の禊であり、禪であるのだ。これを単に經濟的對策に過ぎざるが如く考へるのは、中つてゐない。實は大いなる精神修錬の運動なのである。

　そもそも、經濟生活は、或意味に於いて、國民生活の基礎ではある。食はずには生きてゐられないからだ。しかし、それだからといつて、經濟生活が、國民生活の目標ではない。われわれは家畜ではないからである。喰ふために、肥えるために、われわれは生きてゐるのではない。皇道宣揚といふ大理想實現の聖業翼賛こそは、われわれの生活目標である。しかるに、歐米思想は、經濟生活が人間生活の中心であり、目標であるが如く教へて來た。これこそ、人間の極端の墮落であつて、人間を驅りて禽獸の域に落さうとしたものである。

　農業も商工業も、個人利潤のための企業であるやうな、社會組織は、萬惡の根本である。これは、個人の中に國家を失つた思想で、國家の中に個人を捧げる、わが傅統の精神とは正に對蹠をなすものである。この害惡の残滓が、今日払拭し切れなくて、所謂、闇取引なる罪惡の根源をなしてゐるのである。

　われわれは、完全に私慾を棄てて、大君のために生命を捧げてゐる、幾多の軍神たちを眼の當り[に]見てゐる。何と尊いお手本であらう。岩佐中佐たちは二十臺の若者であり、山本元帥は老人である。山崎部隊長は中年である。こゝにわれわれは、滅私奉公は、決して青年のでもなく、中年のでもなく、老人のでもないことが解る。それは一生を通じての正しい道であり、唯一の道である。

　また、滅私奉公は、單に軍人に限つたことでもない。官公吏や、教育家、その他指導者層はいふまでもないことであるが、われわれ庶民層に於いても、滅私奉公の道はあるのである。否、國民の一人である以上、誰にも、山本の道や山崎の道はあるものである。庭に落ちた一粒の米を拾ふ、これ即ち山本精神であり、破けた着物につぎはぎをして間に合わせる、これ即ち山崎精神である。學生は、教室や運動場に於いて、「常在戰場」であり、勞務者[は]、工場や鑛山に於いて、教員は黒板に於いて、「常在戰場」である。私は、今この原稿を書いてゐることに於いて、常在戰場でなくてはならない。私のこの原稿が、私慾のために書かれない時に、私は山本精神に生きるのであり、私が、日本のためになれかしと思ふ丹誠をもって、原稿を綴りつゝ死んで行くとしたら、それが山崎精神と信ずるのである。

　さうするには、私は、私から離れなくてはならない。即ちおいしいものを食べよう、いゝものを着よう。立派な邸宅に住み、安逸な生活を貪らう。そして、長生しよう。多くの財産を子供に讓らう。世間からは崇敬され、後世に令名を殘さう、などいふ小慾を棄てなければならない。

　かういふ風に私の慾から解脱した時に、人間は、びつくりするほど大きな、明るい、喜びの世界に入るものである。天下の憂、これわが憂であるが、天下の喜び、これわが喜びである。憂は苦痛とは限らない。私のための憂は、そのまゝ苦痛であるが、人のための憂、または天下のための憂は、苦痛であると同時に、その憂を憂ふる心に神は豊かな惠を注ぎたまふのである。それは苦痛ではあっても慾の苦痛ではなくして、愛の苦痛であるからである。

私慾から離れた狀態を、解脱といひ、自由といふ。かゝる心には怖畏がない。怖畏は私慾の分泌物だ。如何なる艱難辛苦も、死そのものさへも、この心を慴伏させることが出來ない。天も地も彼の志をどうすることも出來ない。彼は彼の意のまゝに宇宙の大道を活歩するのである。艱難辛苦といふのも、死生といふのも、結局私的のものである。これらの苦難を行つて、かの私慾の奴隷たちを畏怖せしめるがよい。

　この種の人間が多くなることは、山本や山崎が多くなるやうなもので、國家の力を増進することである。日本國民が、離慾正念の域に達した時に、八紘一宇は實現せられるのであるから、私一個人が、眞劍に努力して、さういふ人間になるといふことは、取りも直さず、皇運翼賛であり、戰力増強である。

　翻って家庭生活の場合を考へよう。夫も妻も、兄弟も姉妹も、私慾から離れたと假定する。その家庭はまことに平和なものであらう。すべての葛藤や啀み合ひは、かげらふの如き私の慾から來るからである。

　さて結論に入らう。私は人生観を簡素化しよう。私の複雜煩瑣な哲學や、利己的な諸々の願望やを放下しよう。身體に喰ひついた毒蛇を拂い除ける如く、頭髪に燃え上る火を揉み消すごとく、大勇猛心を以つて、これらの思想的繋縛から脱れよう。そして、單純な、簡素な、樸な、忠孝の道に據らう。そして、私の生活を、最少限度の慾望の上に建て直して、たゞたゞ大君のために生きよう。また死なう。

　かう觀じ來れば、われわれは實に、行雲流れ、光風霽月の心境の現前するのを見る。

1. 『新時代』1943年10月号に掲載された。 [↑](#footnote-ref-1)